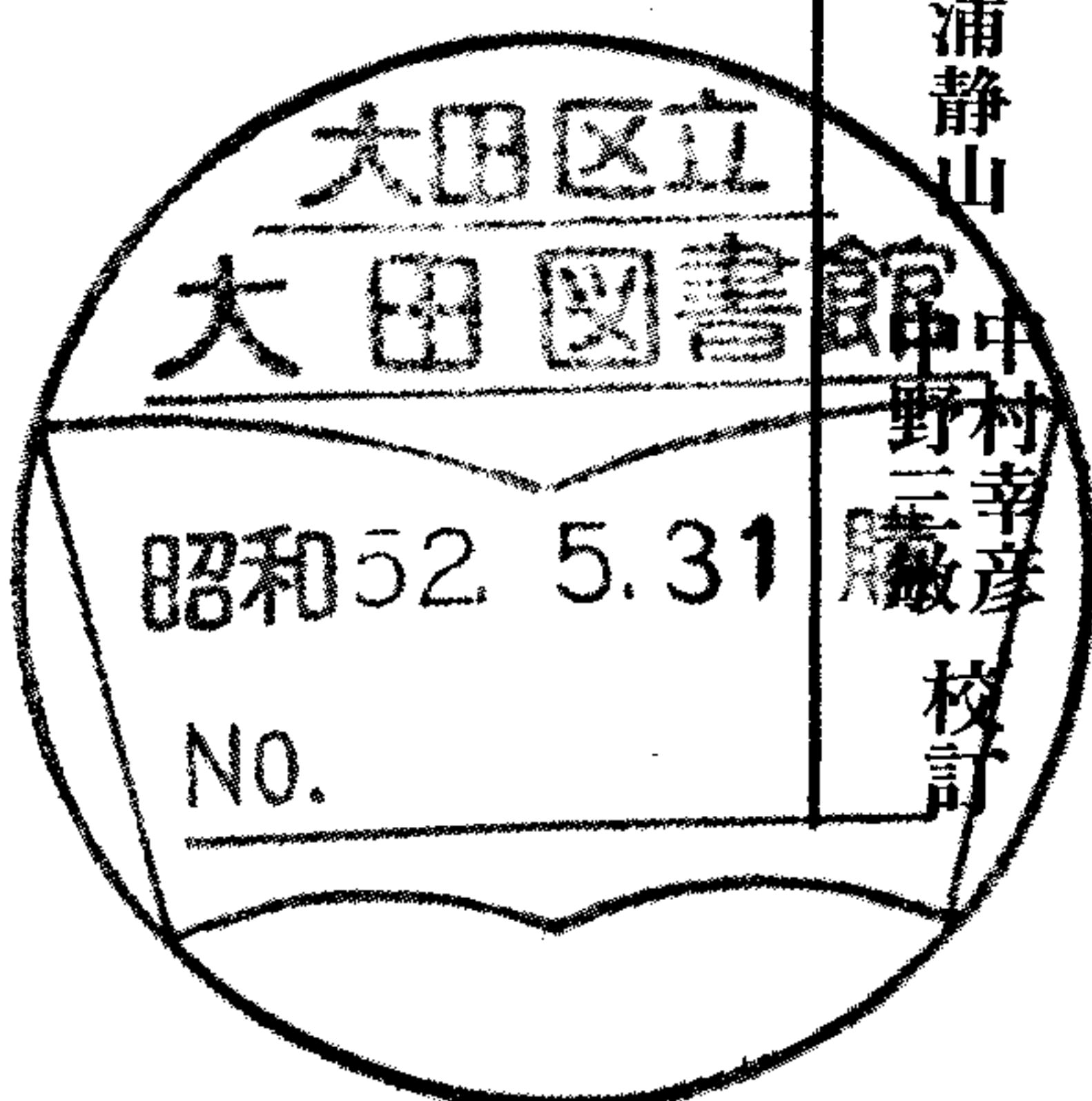


080  
To  
306

東洋文庫  
306

甲子夜話 1

松浦静山 中村幸彦  
野三蔵 校訂



平凡社

千月日なり。剝落して今は四年の字半ば存す。予、園亭に於て時に飯を喫するとき、この石仏に初ほを小しばかり淨器に取りて前に置かしむ。その辺樹木茂れば鳥雀多く棲めり。然ども未だこの飯を啄むことなくして遂に乾枯す。園丁評すらく、地蔵の靈ありて鳥雀懼るゝ故ならんと。一小事なれども何たることを知らず。又小臣の話れるは、神棚に神酒とて備るもの、時過ぎ徹して別器に移すに、酒氣變じて水に類す。神其精英を受け給ふかと云。

〔五〕京御所の官人北小路大学助は、淇園門弟にて有学の人なり。淇園没後、日野亞相〔亞相も亦淇園の門人〕東来のとき從行し來り、林門に入る。此春も亦來れり。折節、林、痴ちを患えてありければ、頻りに呪法を行べしと勧む。林、大に笑ふ。北小路云やう、僕も先年痴を患へ、百方して効なく甚はなはだよし苦めり。呪法より永く痴患を絶たりとて、強て慇懃す。林又笑つて、凡呪は信する人ならで奏効あるべきなし。予信ずる意なければ逆も効あるべからずと云。北小

路曰。僕も亦常に呪法等を喜ばず、只その法に於ては信ぜざれども即効を得たり。からず必まつ行ひ玉ふべし。是まで数十人に伝へしが、効を得ざる者なしと云。しかれども林これを行はず。その呪法を聞くに、絲瓜の肥大なるを二つ水引にて結合せ、患人の姓名年齒を書記し、酒、洗米等を備へ、痴の患なきやうにと祈り、その絲瓜を壺に納め、口貼をして箱に入れ、箱のまゝ家中にても庫中にも、動搖せざる所に置なり。或人煤払の時、其箱を他に移しければ、立所に痴元の如く発す。登時に酒米等を供し、祈りて元の所に復せば痴治りしと云。余り埒も無き事のやうなれど、前にも云ふ如く北小路は有学人にて、妄誕不經の説を為ものに非ず。因て聞所を記す。

〔六〕日光山の御宮に詣るには、山の入口數丈の深溪に朱欄ある橋を渡す。この橋常人の渡ることを許さず。予が登山せしときも、其下なる常用の橋を行たり。朱橋は何か神靈ある処なりと云。將軍家御登山のとき、門主登山のとき、これを渡らせらるる。

及しかば、四五年前彼藩の小田切如竹と云ものゝ手帖とて述齋示す。其文に、

大隱居鷹山事、今年齡古稀に被レ至、寡君と兵庫頭より去月十九日寿筵を被レ開、翌廿日には鷹山元仕い出之者共被レ相招、小生義も罷出候處、其節寡君被レ致三拜領、候御鷹之鶴到着つかまつりまこと誠希代成宣都合に御座候。右年賀に付而は寡君より封内之士民奴婢に至迄、不レ残七十歳以上之者凡おおよそ人弱之男女え、祝之樽酒を賜り、舉國相共祝候事に御座候。

有徳の人は不思議なるものにて、賀筵の日、計らず宿次にて賜禽の着せしも珍しきことなり。如竹は初の名は宇吉と云しよし。述齋年少の時、佐倉の文学渋井太室〔平左衛門〕を師とせし時の同門にて有しより、其好そゆを以て音問たゞ絶ずとの物語なり。

〔八〕徳廟の御養女を降嫁ありし仙台侯、初は越前守、後陸奥守に改む。諱は宗村と云。その父も前後同称にて、致仕して左兵衛督と更ふ。諱は吉村。二

人ともに從四位上中將まで陞遷せり。吉村退隱して袖ヶ崎の別荘に棲めり。後、徳廟、新井宿の木原屋敷へ兎狩に成せられ、御場先にて左兵衛召よし仰出され、奥の衆、騎馬にて袖ヶ崎に馳着き、御旨を伝へければ、吉村速に畏り申し、羽織袴姿にて、刀は前髪にてありし次男に持せて、家僕は一人も召具せず、田疇をつたひて木原屋舗にぞ参りける。御供の諸人集居たる所に、吉村此体にて来りければ、人々見咎て何者なるぞと云罵りけるに、松平左兵衛督、召に因て参たるといらへしかば、人々驚入しとなり。夫より御場近く参りたれば、目付衆始め有司等出迎ひ、案内して通しけるに、刀持の前髪なる少年いつ迄も附添ければ、目付衆、もはや刀持は其辺に扣られ可レ然などありしに、吉村これは次男にて候。幸の折からに候へば、御目見を願奉んと存じ召連候とありければ、目付衆其由し少老衆へ申達し御聴に入ければ、願の通り御目見仰付らるべしとの事にて、吉村ともまゝ御前へ出て御懇の仰蒙り、酒飯賜ひ、

次男には御膳附の御焼物を御手自下されしとなり。夫より兎狩始り、吉村も次男も、御側向の面々一同になりて働き、御脇魔をも仰付られ、終日狩暮させ玉ひ、還御に臨み御暇下され、吉村は元の如く次男つれたるのみにて迎の人も無く、只二人隠栖に帰りとなり。吉村の息宗村御聟なれば、分て御懇の御取扱にもありしなるべし。此頃の君臣際会の模様、げに難有きことならずや。

〔九〕この木原屋舗は、木原氏に神祖御入国の時賜はりし屋舗地なり。屋舗外の田地は木原氏の采地なり。神祖いまだ参州に坐しましゝ時、この木原氏の祖は代々大工棟梁にて、鎌倉足利の屋形造り式法を家に傳へ講究せしが、その頃の大工達は屏櫓等の普請ばかり専要となりて、屋形作りのことなど、貪着する人も無き時節なれば、誰用る者もなく諸国を流浪せり。風と参州に到たるとき其こと御聴に入り、度々召れて御尋などもあり、直に召抱へられ、追々御眷顧を被り、岡崎御城外にて大なる屋舗地下され

ける。御入国のとき其代として、此新井宿の地は賜りしなり。江戸御城御取建、御殿向の補理の時になりて、武将の故実に叶ふ如く御間取など出来しは、皆この木原が功とぞ聞へし。夫を参州御坐の程より、早く召抱置れし御深慮遠識、申も恐多けれど敬感し奉るべし。歎廟の日光山御創立の時も、木原御作事奉行となりて、木工頭と叙爵し、其ことを司りしなり。今日光御宮の雛形、その屋舗、林木の中に安置しあり。扉を洞開して其中神体無し。心ある設方なりけり。屋舗の隅に一寺あり。木原代々の香火院なり。好事の者は訪て見るべし。この屋舗御代々兎狩の地になされしが、孝恭副君この地に成らせられて、御病大漸に至らせられしより、何と無く御成無き地となり、今は典故をも知らぬもの多くなりぬ。

〔一〇〕新井宿は昔の東海道本通路なり。因て今に宿の名を存す。海岸の往来に替りてより、此道廢す。木原屋舗は其地の高處にて、東眺すれば田畠弥望、鈴森通りの大路に寸馬豆人の往還絵の如く、向は

茫洋たる海天ゆゑ、風色佳絶の地なり。『万葉集』に、草蔭の荒藪が崎とよみたるは此地なり。その歌に入りし松なりなど野老の伝る古松あり。先年近藤孟卿〔吉左衛門。奥御祐筆組頭〕と林氏同遊せし日、鈴森を近藤の説に、万葉によみし笠島なるべしと見立しよし。いかさまにも海岸より新井宿の下通りの低き地は、昔は海なるべき地勢なり。その中に鈴森のみ一つ峙である所、笠島にてありしも知るべからず。考鏡に備ふべき一説なりと林氏語れり。

〔一一〕嚴廟の頃、肥後熊本侯細川光尚、慶安二年十二月病篤かりしに、嫡男六丸僅七歳なりしかば、光尚終に臨て、子幼なればとて、我領せる肥後全国を公に返し入んことを申置て属續せり。明る三年四月遺領こと故なく六丸に賜る。そのとき家老長岡式部、同勘解由を大城に召て仰下されしは、光尚齡盛にして没せしこと悼み思召さる。肥後は西海の要地にして殊に國も廣し。六丸いまだ幼弱なれば他に遷さるべけれども、曾祖忠興より世々忠貞あつく仕へ奉り、

## 付・徳川家歴代將軍法号一覽

姓 名	法 号	在 位
徳川家康	安照大權院	慶長八年(一六〇三)～慶長十年(一六〇五)
徳川秀忠	台德院	慶長十年
徳川家光	大猷院	元和九年(一六二三)
徳川家綱	嚴有院	慶安四年(一六四一)
徳川綱吉	常憲院	延宝八年(一六七〇)
徳川家宣	寶永六年	延宝八年(一六〇九)
徳川家継	正徳三年(一七一三)	正徳二年(一七一三)
徳川吉宗	享保一年(一七一六)	延享二年(一七一五)
徳川家重	有章院	延享二年(一七一五)
徳川家治	文昭院	天明七年(一七八七)
徳川家慶	慎德院	天保八年(一八三七)
中村幸彦	文顕院	天保八年(一八三七)
中野三敏	浚明院	嘉永六年(一八五三)

\* 松浦静山、宝暦十年(一七六〇)生、天保十二年(一八三二)没

なかむらゆきひこ  
中村幸彦  
明治44年、兵庫県生。京都大学国文科卒。  
現職：関西大学教授。  
専攻：日本近世文学。  
主著：『戯作論』(角川書店)、『近世文藝思潮攷』  
(岩波書店)、他。

なかの みつとし  
中野三敏  
昭和10年、福岡市生。早稲田大学大学院日本文学  
科修了。  
現職：九州大学文学部助教授。  
専攻：日本近世文学。  
主著：『洒落本・滑稽本・人情本』(小学館)、「山  
岡俊明伝攷」(『近世中期文学の諸問題2』所収  
論文)。

甲子夜話 1 [全6巻]

東洋文庫 306

昭和52年4月25日 初版第1刷発行



校訂者  
中村幸彦  
中野三敏

東京都千代田区四番町4番地  
発行者 下中邦彦

印刷 東洋印刷株式会社  
製本 株式会社 石津製本所

郵便番号102 東京都千代田区四番町4番地  
発行所 振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

©株式会社平凡社 1977  
Printed in Japan 不良本は、直接小社サービス課で  
お取替え致します(送料小社負担)。  
定価は、外箱に表示してあります。